



甲斐源氏のはじまり

甲斐源氏、そして武田氏の痕跡をたどるには、彼らのルーツを知ることが重要になります。その上で、サムライ文化、すなわち彼らの志や生き方、暮らしぶり、艶やかさを思い思いに考察できると良いでしょう。

甲斐源氏のルーツは、天皇家まで遡ります。平安時代前期(9世紀)に、清和天皇の孫・経基王(つねもとおう、生年不詳-961年)が「源」という姓を賜り、皇籍を離れて源経基と名乗ったのが「源氏」の起こりです。経基の子孫たちは、やがて全国に移り住み、各地で武士団を形成してきました。「甲斐源氏」はその一つです。

経基の孫であり、藤原道長(ふじわらのみちなが、966年-1028年)に仕えていた四天王(4人の兵(つわもの))の一人である源頼信(みなもとのよりのぶ、968年-1048年)は1029(長元2)年に甲斐守に任官し、在京のまま甲斐守を勤めたといわれています。その後、甲斐守は係累の頼義、新羅三郎義光(しんらさぶろうよしみつ、1045年-1127年)、源義清(みなもとのよしきよ、1075年-1149年)と継承されたと伝えられています。

最初に甲斐国に土着したのは、義光の子・義清と孫・清光(きよみつ、1110年-1168年)だといわれています。義光は嫡男・善業の正室の父である平清幹から譲り受けた常陸国武田郷(茨城県ひたちなか市)を、次男・義清に引き継ぎました。義清は、武田郷で武田冠者を名乗ります。しかし、父・義光の死後、義清は息子・清光と共に在庁官人であった平清幹の嫡男と対立し、敗北。やがて甲斐国・市河荘(いちかわのしょう、中央市・昭和町・市川三郷町付近)に配流されたと伝えられています。

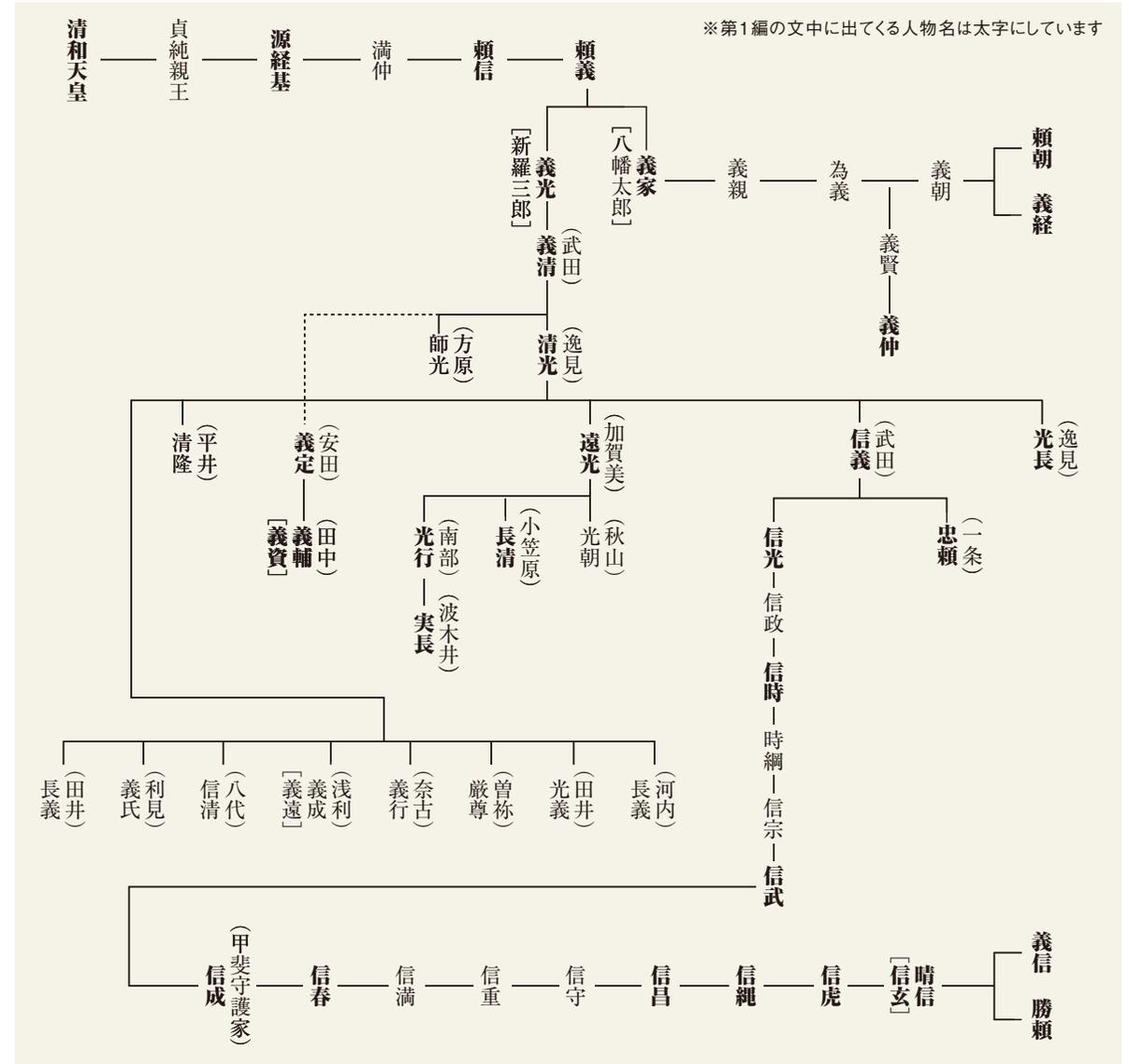
その後、清光は八ヶ岳山麓の逸見(へみ、谷戸城〜若神子城の周辺、諸説あり)に拠点を構えて「逸見(へみ)」姓を名乗ります。やがて清光の息子たちは、既に国府や寺社荘園などの既存勢力が及んでいた甲府盆地の中心部を避けるように、その縁辺部へ勢力を伸ばしていきます。その一人の光長(みつなが)は逸見の地と姓を受け継ぎ、信義(のぶよし)は武田(韮崎市神山町)の武田八幡宮で元服して武田姓、遠光(とおみつ)は加賀美(南アルプス市)で加賀美姓、義定(よしさだ、実は養子で、義光か義清の子だという説あり)は牧ノ荘(まきのしょう、笛吹市・山梨市・甲州市)で安田姓——というように、各地で新しい姓を名乗り分派していきました。

また、山梨は古代から馬の産地であり、朝廷に馬を貢納するための牧場・御牧(みまき)が置かれていました。馬の飼育に精通した渡来人の文化がいち早く取り入れられたこと、八ヶ岳山麓のなだらかな斜面、御勅使川(みだいがわ)の広大な氾濫原などが牧に適した土地だったことによると考えられます。牧には、馬、そして馬を飼育し訓練する技術者がおり、牧を作るために伐った木は木材として、あるいは鉄生産のための燃料としても活用されました。こうしたことが、甲斐源氏の発展に影響を与えたと考えられます。



武田八幡宮二ノ鳥居からの遠望

甲斐源氏と関連する氏族の略系図



甲斐源氏の始祖・新羅三郎義光

甲斐源氏たちは、新羅三郎義光を始祖と仰ぎ崇敬していました。兄の源義家(みなもとのよしいえ:源頼朝の高祖父、1039年-1106年)と共に、東北の覇者である奥州藤原氏が隆盛するきっかけとなった後三年合戦(1083年-1087年)に参戦し、武士の棟梁として源氏の名声を不動のものとする礎を築いたといわれています。兄・義家の子孫もまた、義光の子孫たちと同様に東国で勢力を伸ばし、その係累からは源頼朝、義経、木曾義仲などが輩出されました。

なお、義光は三井寺(みいでら、滋賀県)の新羅神社(しんらじんじゃ、現在の神羅善神堂)の神前で元服して新羅三郎と名乗ったとされ、新羅神社は甲斐源氏の原点だと言えます。山梨県内では南部町に新羅神社があり、義光が祀られています。